The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	閉ざされた声 ： 朗読文学としての「東京だより」
Author(s)	井原, あや
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 82-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

閉ざされた声

――朗読文学としての「東京だより」

井原あや

キーワード：太宰治　東京だより　朗読文学　文学報国
日本文学報国会

1、はじめに

その少女の美しさをどう読み取るか。太宰治の短篇小説「東京だより」（『文学報国』一九四四・八・一〇）の研究は、作中人物である一人の少女の、「あざやか」な、そして「高貴の血」さえも思わせる美しさの意味を読み取ることに力点があったと言えよう。

ここで、「東京だより」の内容を簡単にまとめてみれば、小説家の「私」は友人で徴用工として工場で働く画家の「私の小説集の表紙の画をかいてみたい」という申し出を受け入れ、彼と会うために工場を訪問する。工場の事務所では、一〇人ほどの少女が一心に働いているのだが、その中に「あざやかに他の人と違つて美しい」少女がおり、「私」はその少女の美しさは「高貴の血」によるものと一人合点する。三度目に工場を訪問した際、「私」は二列縦隊で「産業戦士の歌」を合唱しながら歩く少女たちに出会い、その列を追う松葉杖の少女を見た。生まれつき「足が悪い」と思われるその少女こそが、あの「美しい」少女だった、というものである。先行研究は決して多くはないが、短篇小説ながらも近年比較的言及され、例えば、権錫永は、「小説家らしい「私」は、戦争期体制について批判することがないという点である。その意味で、戦争期体制に組み込まれた、きわめて「平凡」な人物だと言える。」「「平凡」な「私」という設定を通して、太宰治の「平凡」さを思わせつつ、その「平凡」な語りの中に伝達すべき様々な情報を盛り込んでいくのである」[1]と語り手である小説家の「私」に注目した上で、その小説家が見つめる少女を、次のように読み取っている。

「私」は「その少女は生まれた時から足が悪い様子」だとし、「美しい筈だ」と言う。しかし、この語りには、その少女がなぜ美しいのかを端的に示すキーワードが空白として残されている。つまり、その少女は「足が悪い」という「せつぱつまつた現実」のために「美しい」のだ、というだけでは説明にならない。みんなが「特徴を失ひ、所謂「個人事情」も何も忘れて」いる中で、足が不自由なために同化しようもしようのない、画一化されようもされようのない、そのために「特徴」「個人事情」をとどめているという皮肉な理由によって、たった一人「美しい」のである。それが本当に「美しい」と言えるものかどうかは別問題であり、語り手である「私」の感性への同調を、我々が押しつけられる必要もない。こうして、その少女の存在は、画一化した少女たちの集団のイメージを強める役割を担うことになるのであり、「東京だより」は、そういった社会相を浮き彫りにし、皮肉を交えて批評したものであったと言えよう。(2)

こうした小説家の「私」と少女の関係性をより密接なものとする佐々木義登は、「小説前半、少女たちの集団、体制に取り込まれ制度におもねる画家などの描写によって、「私」の目に見える対象、つまり世界は戦中のイデオロギーに支えられた社会や世間という枠組みの中に捉えられている。しかし一人の少女と出会うことで、「私」に新たな世界の見え方が生ずるのである」(3)というように、「私」が捉えられている「戦中のイデオロギー」や「枠組み」から「新しい世界」へと転換させる役割を担う存在として少女を読み解いている。そして、「私」に「新たな世界の見え方」を提示するきっかけを作った少女について、「「東京だより」の少女から発する「美しさ」とは、一人の人間が生きて存在すること、そのものの内部から発せられる実感、その実感のあまりある重さによるものだと、「私」が感じているところにこそあるのではないか」(4)と結論付けている。

こうした先行研究をまとめてみれば、「東京だより」とは、語り手である小説家の「私」が見つめた足の不自由な「美しい」少女の内実を、戦時下という時代で照らし出すことによって読解可能となるテクストと言えよう。(5)

確かに「東京だより」において、「私」の目を惹きつけてやまない少女の意味を考えることは重要であるが、テクスト自体が持つ批評性にも注意する必要があるだろう。本稿では、「東京だより」が、日本文学報国会の機関紙である「文学報国」の紙面に、「朗読文学　短篇小説特輯」の一篇として掲載されたことに注目してみたい。この特集では「東京だより」のほかに、室生犀星「謎」、大林清「月光の曲」、庄司総一「蛍」、和田伝「もつと大きなじやがいも」の四篇も掲載されていた。一九四四年八月一〇日付の「文学報国」の第二面のほとんどは、「東京だより」を含む五作によって埋められており、当時朗読文学が注目

を集めていたことがうかがえる。（なお、同年一〇月一日には「朗読文学　短篇小説特輯」の第二段として次の五篇が掲載されている。加藤武雄「煙草」、中村星湖「茗荷の子」、織田作之助「皮膚」、打木村治「稲」、島村利正「故郷の梅」。）

そこで本稿では、「東京だより」が朗読文学として書かれ、発表されたという点に注目し、朗読文学をめぐる当時の状況や「文学報国」の言説をおさえた上で、「東京だより」がどのような意味を含み持つものとして読み得るか検討していくこととする。

2、朗読文学の動き

戦時下の朗読文学のなかでも特に詩については、すでに坪井秀人が『声の祝祭――日本近代詩と戦争』[6]において、音声中心主義の時代に詩がいかにメディアと結びついたのか詳細に論じており、本稿においても多くの示唆を受けたが、ここで、まずは朗読文学なる言葉がメディア上に出現し、報じられていく過程を確認してみよう。冒頭で述べた通り、「東京だより」は日本文学報国会の機関紙である「文学報国」に掲載された。この朗読文学という言葉は、「文学報国」の紙面で用いられるより前に、一般紙において宣伝がなされていた。一般紙で朗読文学という言葉が頻繁に見られるようになるのは一九四二年九月からであり、例えば「朝日新聞」は、「朗読文学の提唱」と題して次のような記事を掲載している。

翼賛会文化部では、『朗読文学』の確立運動を展開することになつた。国民の〝はなしことば〟を正しくし、古典の再認識と文学の新分野を開拓しようといふのである、まづ朗読に適する文学の創作を現代作家に依頼するとともに、過去の文学の中からも適当なものを選ぶことに決つた。

既存の文学の中から選ぶについては「平家物語の何の章」とか「北村透谷の何」とかいふ風に一般から募集、これをパンフレットに収録し、ラヂオで放送したり、朗読会を開いたり、或は隣組常会で朗読したりして国民生活に豊かさと健やかさを与へる計画である。[7]

右の記事が言うところの「朗読文学」とは、「古典の再認識と文学の新分野の開拓」をいわゆる国語醇化運動と関連づけたものである。さらにこの記事から三日後には、大政翼賛会文化部が「耳を通して国語を醇化し国民の情操を陶冶するため」に「『朗読文学』の確立に乗出した」[8]ことが述べられ、「朗読文学」にふさわしい作品を広く国民から募集することが報じられている。ただし朗読文学は、国語醇化運動とのみ結びついたのではない。その辺りの事情は、同じ九月末に当時大政翼賛会文化部副部長であった日比野士朗が「印刷物によつて文学を鑑賞するといふことは、視覚を媒体としてその作品に理解や共感を持つといふことである。この形式が、われわれの言葉とか文章とかに、思考上の一種の深味を与へた功績は事実だが、その一面、

国語とか文脈とかに混乱を来した点も否みがたい」[9]と述べているところからも垣間見える。つまり「印刷物によつて文学を鑑賞する」ことの困難である。

日比野はここで、印刷物を通した文学鑑賞が引き起こす「混乱」を語っているが、実際はそうした「混乱」よりも用紙不足が大きく影響していよう。それは、一九四三年二月一一日に読売新聞社と日本文学報国会が主催した「国民士気昂揚　朗読文学の夕」を知らせる記事に明確に示されている。「読売新聞」が掲げたこの記事には、「決戦下の国民士気と必勝信念の昂揚を図るため、左の如く「朗読文学の夕」を開催、勝ち抜く闘魂を堅持せしむると共に用紙調整下、（略）先鞭をつけること、しました」[10]とあって、当然のことながら用紙不足もまた、朗読文学の提唱と普及に大きく関わっていたことがわかる（なお、「朗読文学の夕」は、第二回目から「朗読文学の会」と名称を変更し、紙面を通して第九回までが確認できる。「朗読文学の会」第二回目は三月二〇日、第三回目は四月一七日、第四回目は五月二二日、第五回目を六月一九日、第六回を七月一七日（「第三回海の記念日行事」の一つとして開催）、第七回を九月一八日、第八回が一〇月一六日、第九回目は一一月二〇日に行われ、ほぼ一カ月に一度の割合で開催されていた）。

この後、朗読文学はさらに進展をみせ、勤労とも結びついていった。「勤労青少年」のために読書を確保することは、「増産のためにも、我々のつとめでなければならぬ」と説く波多野完治は、朗読を導入することによって、読書の「集団的」「文化活動」を目指していく。[11]こうしたなか、一九四四年には新たな朗読文学を模索して、「新朗読文学」なる言葉が次のように誌面に掲載されるようになる。

出版物入手難の折柄、活字に作らぬ耳からの文学を起さうと文学報国会、放送協会、情報局が一体となつて新朗読文学を起すことになつた、これは従来の眼で読む文学から耳で聞く文学に発展せしめようとするもので、日本文学の伝統たる〝聴き継ぎ語り継いだ文学〟〝語りもの〟への復古でもある。

最近のいわゆる〝朗読文学〟は既成の作品を如何に巧く読むかといふ点にあつたが、新提唱の朗読文学は文字づらよりも耳で聴いての美しさに重点を置く新作品を生まうといふにある。

このため「朗読文学委員会」を設置することになり、来る十一日大東亜会館に文報の中村事務局長、柳田國男、尾崎士郎氏等、放送協会の大川文芸部長、水川教養部長、横山企画部長等、情報局の井上文芸課長、水谷放送課長等が集つて準備会を開く、新作品が生れたら、放送に職場に軍病院に、集会に大いに活用するはずである。[12]

これまでの朗読文学は、「既成の作品を如何に巧く読むか」と

いう点に比重がかけられていたが、「新朗読文学」は文字通り、新しい朗読文学――「新作品」を生み出すことを目標としている。この記事が「朝日新聞」に掲載されたのが一九四四年七月八日なので、太宰の「東京だより」は、これからほぼ一カ月後に「文学報国」に発表されたことになる。ここまで、一般紙のなかの朗読文学の動きを確認したが、こうした一連の流れを受けて、既存の作品の朗読だけではなく、朗読に適した新しい作品を求める動きに応じて創作されたのが、「東京だより」をはじめとする「朗読文学　短篇小説特輯」に寄せられた作品ということになるだろう。

3、「文学報国」のなかの朗読文学

右の通り、一般紙の中では一九四二年九月頃から朗読文学の確立を目指す動きがあり、それは国語の醇化や用紙不足、さらには増産を目指す勤労と結び付きながら継続され、一九四四年には既存の作品を朗読するのではなく、朗読文学委員会によって新たな朗読文学の創作が目指されるようになった。こうした朗読文学をめぐる動きを、同時期にさらに詳しく報じていたのが「文学報国」である。

周知の通り「文学報国」は、「日本学芸新聞」が日本文学報国会に献納され、一九四三年八月に第一号が発行された。刊行頻度は旬刊で、「復刻版　文学報国」（一九九〇年一二月、不二出版。なお、「解題」は山内祥史、「解説」は高橋新太郎が担当）によって、一九四三年八月二〇日から一九四五年四月一〇日までの四八号にわたって刊行されていたことが確認できる。この日本文学報国会については、日本文学報国会の主務官庁であった情報局第五部第三課に嘱託として勤めていた平野謙が「当時、私は『現代文学』という同人雑誌の同人だったが、周囲の友人たちに入会しておいた方がいい、とすすめたような記憶もある。このことは、文学報国会という政府当局をうしろ楯にした組織に入会できることが一種の免罪符とも受け取られがちだった当時の雰囲気を示唆していたようである。もしかしたら、入会できぬことは当時の文筆業者として不適格と烙印づけられるようなデマゴギーさえ、一部流布していたかもしれない」[13]と後年回想しているが、会の機関紙である「文学報国」の紙面は、そうした噂やデマに取り巻かれた面以外も垣間見せてくれる。

その一例が、紙面を通して行われた朗読文学に関する真下五一と寺崎浩のやりとりである。先述の「朝日新聞」や「読売新聞」は、朗読文学を国民に知らしめる側として記事を掲載し、朗読文学を宣伝したが、「文学報国」は文筆を生業とする日本文学報国会の会員に向けられた機関紙だけあって、朗読文学の担い手・作り手の揺れや葛藤が紙面に記載されている点が、注目に値するだろう。一九四三年一〇月一日付の「文学報国」では、真下五一が「代用品文学の汚名　朗読文学について」と題して次のように述べている。

最近やかましくいはれだしてきた朗読文学も、日を重ねるに従つて大分板についてきたやうではあるが、その提唱されだした唯一の理由が紙の払底によるといふことは、誰もあやしまうとする者のない事実ではあらうけれども、たゞこれを以ていいことにしてゐるのではどうも余りに間に合はせ的でさうした代用品的な押売り理由を肝心の作者、朗読者自身が得々と公言して何のはばかるところのないのをみては、逃避的であるといふこと以上に、少々鉄面皮的なそしりをまぬがれないものであらう。[14]

根源的な「唯一の理由が紙の払底によるといふことは、誰もあやしまうとする者のない事実」であること、そして現行の朗読文学が「代用品」の汚名に甘んじていること。一般紙で報じられていた国語の醇化云々の理由ももちろんあろうが、右に挙げた真下の記事からは、文学に携わる者として、朗読文学が「代用品」と見做される情況を苦々しく思う、素直な意見がうかがえる。そして、この真下の意見から一か月後、寺崎浩が「朗読文学委員から　真下五一氏に答ふ」と題して朗読文学委員会の立場から返答をしているのも、「文学報国」という機関紙ならではと言えよう。寺崎は真下の意見に対して、朗読文学の現状を以下のように説明する。

真下五一氏の朗読文学について一言あつたことについて、朗読文学研究会のことを書く。久保田万太郎氏を委員長にして数回委員会が開かれた。委員会としては実験研究中である。耳よりする文学と、目よりする文学とは別個のものであることはいふまでもない。耳よりの文学が果してどういふものであるか、どうなるかについてはまだ何も分つてゐない。構成のある物語、風の中に消えてゆく音楽のやうな物語、或は象徴的な文章、さまざまな方法がある。放送は大衆性を一番重んじるので、朗読文学としては一面しか現はれない怨みがある。で、これを発展せしめるためには放送局の協力を得、昼間の閑な時に多くの試みをしてみる必要があると思ふ。効果は観念だけからでは分らないものである。

かういう意味あひから放送局の力添へを受けてはゐるが、それ以上まだ具体化してはゐない。さらに朗読するについて、朗読の演出をやらうといふことにもなつてゐる。声の変化をつけ陰影をつけ、テムポを早くし遅くすることで感じも違つてくるので、朗読法の研究も別個に行ふことになつてゐる。

これらがよりよい成果を生めば一つの文学の新しい型として存在してゆく可能性はある。（略）

これは新しく直接的に訴へる文学として多くの効用を持つてゐる。舞台、高座、幕間、はもとより、町の辻々でもやれる。紙芝居と同じやうに簡単にやることが出来る。

（略）だから紙が無いからやるといふのではなく発生は全然別種の所からであり、読売紙が力を入れて、何とか物にしようとしてゐるほどである。しかも将来、非常に役立つ種類のものである。委員が多忙で、はかばかしい成果を生んでは居ないが、努力をしてゐる事実を報告して何らかの参考に資したいと思ふ。[15]

以上、引用が長くなったが、この段階では真下の苦言に応えるだけの準備が委員会側になされていないことがわかる。寺崎の言う「読売紙が力を入れて、何とか物にしようとしてゐる」というのは、先に述べた通り、「読売新聞」紙面で確認できた九回にわたる「朗読文学の会」を指すものと思われるが、委員会を立ち上げても朗読文学に対して具体的な方針などもなく、「はかばかしい成果」も生まれていない。これでは真下が指摘する通り、朗読文学が紙不足に対応するための「代用品」にしか思えないのも無理はない。

こうした朗読文学を提供する側（日本文学報国会会員）の抵抗感は、翌一九四四年になると次第に薄れていく。一九四四年七月二〇日には、同月八日の「朝日新聞」において報じられた「新朗読文学」への期待が「文学報国」の紙面[16]にも見え、翌八月一〇日の「文学報国」に掲載された「事務局・事務日誌　七月（下）　八月（上）」には、八月「七日　朗読文学委員会　新しいジヤンルとしての朗読文学を確立する必要を検討、創作と共に古典の朗読を提案、それ〴〵工場、放送局と積極的に連携協力し朗読文学の発展をはかる」[17]というように、新朗読文学は戦時下の増産を支える工場と連携していくことが明示されている。このような工場との連携については、この「事務局・事務日誌」の記載のみならず、「東京だより」を含む「朗読文学　短篇小説特輯」の冒頭にも明記されている。

朗読して聴く者の耳に訴へる文学――朗読文学確立の問題は、唯単に用紙不足による出版の困難、新聞雑誌の頁数減少などに依る発表舞台の激減といふやうな外部的条件の制約にのみ因る消極的理由よりも、近時に於ける放送技術事業の発展普及、工場、会社、学校その他集団生活者層の増加に伴なふ拡声装置の整備等によつて必然的に要望せられつゝある文学の新分野である、本会は夙にその重要性を認識し、朗読文学研究委員会を設置、種々その研究、普及に努めてきたが、時局の推移に即応し、研究委員会は既に朗読文学委員会に発展、拡大強化更に強力なる運動を展開しつゝある現状に鑑み、小説部会員の珠玉短篇を得て特輯を試みた。[18]

ここでは、朗読文学が前述の真下が苦言を呈した用紙不足といった「外部的条件の制約にのみ因る消極的理由」からなるものではなく、「工場、会社、学校その他集団生活者層の増加に伴

なふ拡声装置の整備等によつて必然的に要望せられつつある文学の新分野」であることが強調されている。こうして「文学報国」を通して朗読文学の動きを見てみれば、それを提供する側であるだけに、一般紙には記されなかった作家の揺れが見てとれ、さらに戦時下の増産を支える工場をはじめとする「集団生活者」との繋がりも示されていることがわかる。代用品ではなく、曲がりなりにも「文学の新分野」と謳われた朗読文学に対して、日本文学報国会の小説部会員たちは、どのように向き合い、朗読文学を綴ったのであろうか。

ここで、「東京だより」を検討する前に、いま少し「文学報国」の紙面にこだわりたい。「文学報国」に掲載された朗読文学は、太宰の「東京だより」を含む「朗読文学　短篇小説特輯」が最初ではない。一九四四年六月一日付の「文学報国」に里村欣三は「ブキテマ高地」を発表するが、そこには「この作品は特に〝朗読用のために〟といふ意図のもとに執筆して戴いた。工場で、農山村で、短い休みの時間にでも容易に取り上げられ、戦意の昂揚に文学の直接的な役立てになるやうな一つの試みとして」と「編輯室」の説明が付されている。以下に、その「ブキテマ高地」の冒頭部分を引用してみたい。

なんといふ物凄さだ…

スーツとほの白い光の尾が流れても、兵隊たちはばたばたと姿勢を倒した。（略）

牟田口兵団の各部隊は、二月十二日の夕方から、ブキテマ高地のいたるところで、ピアノの鍵盤を叩き鳴らすやうな、迫撃砲弾の弾幕につつまれてゐた。シユツ、シユルン…と闇をひき裂いて飛び交ふ砲弾は、雷鳴とゝもに荒れ狂ふ稲妻の光景を描く。（略）あちらの高地、こちらのゴム林で―ワワアツ、ギヤアツ…と、たゞならぬ喚声やら、異様な悲鳴が起つてゐる。たちまちシーンとなり、突然ダカンツ…ドロン、ドロドロドローン…と、立てつゞけに鳴り出す砲弾。（略）[19]

この「ブキテマ高地」とは、シンガポールのブキテマ高地攻略を描いたものである。里村自身が報道班員として南方に赴いていたために題材として選んだのだろうが、一読してカタカナで示された擬音語の多さに気付く。このように擬音語を多数用いたのは、戦地に響きわたる砲弾のほか、「喚声」や「悲鳴」を書きつけ朗読することで、聴衆に臨場感をもたらし一体化を目指したのだろう。先に引用した冒頭部分以外にも、「砲声が杜切れると忽ち、ダ、ダ、ダ、ダダダ…と地崩れのやうな跫音を立て、躍進を起す部隊」「砲弾の閃光が高地の急斜面をすれすれに、シユンシユンと矢のやうに掠める」「ひよろひよろした椰子が爆風で大風のやうに揺れてゐる。メキメキと音を立てゝ幹の途中から真つ二つになる樹木」など、多用される擬音語は、凄惨な戦場の有様を雄弁に語っているのだ。里村の「ブキテマ高地」

が「文学報国」に発表されたのは、時期としては、先の真下五一と寺崎浩の朗読文学に対する意見（一九四三年一〇月一日、ならびに同年一一月一日）の後で、試行錯誤の末にまとめられた「朗読用」小説にも見える。もちろん南方へ報道班員として赴いていた里村が描く「ブキテマ高地」と、太宰の「東京だより」とを比較すること自体に無理があるのだが、「ブキテマ高地」は前述の通り饒舌なまでに戦地を書いている。それでは、「東京だより」は「朗読して聴く者の耳に訴へる文学」という朗読文学としての特質を備えていたのだろうか。

4、閉ざされた声――朗読文学としての「東京だより」

「東京だより」は、働く少女たちの姿をうつし出しながら、次のように始まる。

> 東京は、いま、働く少女で一ぱいです。朝夕、工場の行き帰り、少女たちは二列縦隊に並んで産業戦士の歌を合唱しながら東京の街を行進します。ほとんどもう、男の子と同じ服装をしてゐます。でも、下駄の鼻緒が赤くて、その一点にだけ、女の子の匂いを残してゐます。どの子もみんな、同じ様な顔をしてゐます。年の頃さへ、はつきり見当がつきません。全部をおかみに捧げ切ると、人間は、顔の特徴も年恰好も綺麗に失つてしまふものかも知れません。東京の街を行進している時だけでなく、この女の子たちの作業中あるひは執務中の姿を見ると、なお一層、ひとりひとりの特徴を失ひ、所謂『個人事情』も何も忘れて、お国のために精出してゐるのが、よくわかるやうな気がします。

「お国のために」工場で働く少女たちに向けられた視線は、その後、一人の美しい少女に向けられることになるのだが、この「工場」という舞台設定には注意を払う必要があるだろう。先述した通り、「文学報国」の紙面において、工場は拡声装置が整備され、朗読文学を広めるのに恰好の場所であり、工場との連携協力が朗読文学に必要であることが説かれていた。つまり、「東京だより」は、朗読文学が広まり消費される場であった工場を舞台にしているのである。

さらに、工場で働く少女たちが「朝夕、工場の行き帰り」に合唱する「産業戦士の歌」にも注目してみたい。右に挙げたように、「東京だより」の冒頭においても「産業戦士の歌」は触れられているが、小説末尾近くに至って再び「ふと背後に少女たちの合唱を聞き、振りむいて見ると、けふの作業を終へた少女たちが二列縦隊を作つて、産業戦士の歌を高く合唱しながら、工場の中庭から出て来るところでした」と描かれている。この「産業戦士の歌」は、当時実際に「国民歌」[20]として制定されていた歌であるのだが、小説の冒頭と末尾近くに「産業戦士の歌」という言葉を差し挟むことで、小説を読む者ならぬ朗読を聞く者たちに向けて、国民歌として知られている「産業戦士の歌」

を響きわたらせる効果を持っていると言えよう。

このように音楽を小説内に取り込むのは、何も太宰に限ったことではない。ここで、大林清「月光の曲」を見てみよう。「月光の曲」は、「東京だより」ともに「朗読文学　短篇小説特輯」に掲載された小説で、その内容はベトナムのショロンのビヤホールを舞台に、「日本と日本人へのいわれない反感」を抱くフランス水兵がジャズに狂乱する中、日本人伍長がベートーヴェンの「月光の曲」をピアノで弾き、フランス水兵の「乱痴気」がおさまるというものである。「享楽」的なアメリカ仕込みのジャズが鳴り響くビヤホールを一瞬にしてしずめた日本人が弾くベートーヴェン（言うまでもないがベートーヴェンはドイツの作曲家である）の曲。朗読文学は、ラジオや工場などに設置された拡声装置をもとに広められることも想定しているので、ジャズと「月光の曲」の対比も、そうしたことを見越してのことだろう。「東京だより」もまた、「産業戦士の歌」の合唱を用いて、朗読する声と合唱する声という多層的な声が小説空間を立体的に立ち上がらせていくのである。

しかし、そうした声は末尾において突如遮断される。

> 或る夕方の私は、三度目の工場訪問を終へて工場の正門から出た時、ふと背後に少女たちの合唱を聞き、振りむいて見ると、けふの作業を終へた少女たちが二列縦隊を作つて、産業戦士の歌を高く合唱しながら、工場の中庭から出て来るところでした。私は立ちどまつて、その元気な一隊を見送りました。さうして私は、愕然としました。あの事務所の少女が、みなからひとりおくれて、松葉杖をついて歩いて来るのです。見てゐるうちに、私の眼が熱くなつて来ました。美しい筈だ、その少女は生れた時から足が悪い様子でした。右足の足首のところが、いや、私はさすがに言ふに忍びない。松葉杖をついて、黙つて私の前をとほつて行きました。

小説家の「私」は、末尾において「私」の目を惹きつけてやまない「高貴の血」をも思わせるあの美しい少女を見つける。普段事務所の机に向かう、座ったままの彼女しか知らなかった「私」は、そこで初めて、彼女の足が不自由であることに気が付くのだが、「私」は彼女の足の様子を「さすがに言ふに忍びない」と言って語ろうとしないのである。

「東京」の「いま」の様子を饒舌に語った私の声はそこで閉ざされる。そしてまた、「私」が見つめた美しい少女も「黙って私の前をとほつて」いく。すなわち、「私」も少女も黙ったまま、小説は終わるのである。「言ふに忍びない」と語ることをやめた「私」と、「国民歌」である「産業戦士の歌」を他の少女たちのように高らかに歌うことなく「黙つて」「とほつて」行く少女。

「東京だより」は、「文学報国」の中で、朗読文学の協力先として重点的に報道される工場を舞台とし、小説の最初と末尾に

「産業戦士の歌」を歌う少女たちを登場させるなど、朗読文学のキーワードとも言える「工場」や放送向けであることを十分に取り入れ、当時試行錯誤の末に編み出された朗読文学の手本のようなテンプレートを見せている。しかし、「朗読して聴く者の耳に訴へる文学」こそが朗読文学の特質であるにもかかわらず、物語の末尾に至って「私」の声も「私」が見つめた少女の歌声も響かない。美しい「国語」を語り、「朗読して聴く者の耳に訴へる文学」であることを目的とする朗読文学に背を向けるかのように声を閉ざす「私」と「黙つ」たままの少女。「東京だより」を朗読文学として聞く者は、二人の声を聞くことのないまま、小説を聞き終わるのである。

このように、一九四二年から四四年までの一般紙ならびに日本文学報国会機関紙「文学報国」にあらわれた言説から朗読文学の詳細を追った上で「東京だより」を読めば、「文学報国」が求めた朗読文学の型に寄り添いつつも、一方で朗読とは正反対の、声を閉ざしてしまう二人を描くというズレをも孕んだ小説と言えるだろう。戦時下の太宰の創作活動について、紅野謙介が「戦争は小説のなかでせいぜい背景か、遠い雷鳴のようなものとして描かれたが、そこにこそむしろ戦争の濃厚な影を見るべきであろう」[21]と指摘するように、この「東京だより」が見せた朗読文学――語るための文学に語らない人物を描き出すというズレが生み出したテクストの批評性にも、「戦争の濃厚な影」を見出す必要があるだろう。

注

(1) 権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争(3)――太宰治「散華」・「東京だより」――」(『北海道大学文学研究科紀要』二〇〇二・二。)七三・七五ページ。

(2) 注(1)に同じ。七六ページ。

(3) 佐々木義登「存在への凝視――太宰治「東京だより」論――」(『二松』二〇〇八・三。)一四三ページ。

(4) 注(3)に同じ。一四三ページ。

(5) 「東京だより」の先行研究は・ほかに布野栄一「「東京だより」抵抗の文学　論」(『太宰治研究』一二巻、二〇〇四・六)ならびに野々宮紀子「「東京だより」に描かれた女性像」(『解釈と鑑賞』二〇〇七・一一)がある。

(6) 坪井秀人『声の祝祭――日本近代詩と戦争』(一九九七・八、名古屋大学出版会)

(7) 無署名「朗読文学の提唱」(『朝日新聞』一九四二・九・一二、朝刊)

(8) 無署名「朗読文学に衆智集む」(『朝日新聞』一九四二・九・一五、朝刊)

(9) 日比野士朗「朗読文学の提唱　日本語純化に一つの示唆」(『朝日新聞』一九四二・九・三〇、朝刊)

(10) 無署名「国民士気昂揚　朗読文学の夕」(『読売新聞』一九四三・二・二、朝刊)。なお、その後の記事「朗読文学の夕　ゆうべ本社講堂に開く」(『読売新聞』一九四三・二・一二、朝刊)によると、初の試みとなったこの催しには、「熱心な男女五百名の限定会員」が集まり、清水本社文化部長、久米正雄文学報国会事務局長の挨拶の後、前田夕暮、岡山優、今井邦子の短歌、近藤東、尾崎喜八の詩、真杉静枝、船橋聖一、村松梢風の小説、鹽田良平の古典文学朗読のほか、山本安英が島崎藤村の「千曲川のスケツチ」を朗読したという。

(11) 波多野完治「勤労文化（読書）　朗読文学の価値」(『朝日

新聞」一九四三・五・一一、朝刊）

（12）無署名「新朗読文学　職場、軍病院へ」（「朝日新聞」一九四四・七・八、朝刊）

（13）平野謙「日本文学報国会の成立」（「文学」一九六一・五）四四八ページ。

（14）真下五一「代用品文学の汚名　朗読文学について」（「文学報国」第五号、一九四三・一〇・一）

（15）寺崎浩「朗読文学委員から　真下五一氏に答ふ」（「文学報国」第八号、一九四三・一一・一）

（16）園池公功「ラヂオの指導性」（「文学報国」第三一号、一九四四・七・二〇）

（17）無署名「事務局・事務日誌　七月（下）　八月（上）」（「文学報国」第三三号、一九四四・八・一〇）

（18）無署名「朗読文学　短篇小説特輯」（「文学報国」第三三号、一九四四・八・一〇）

（19）里村欣三「ブキテマ高地」（「文学報国」第二七号、一九四四・六・一）

（20）「産業戦士の歌」については、「朝日新聞」一九四一年一月九日付夕刊に以下のような広告が掲載されている。「厚生省・推薦　大日本産業報国会・制定　国民歌／守れ職場は吾等の陣地／新東亜建設は吾等の手で!!働く者の喜びを歌で讃へた全日本産業人の勤労歌謡!!」（広告「テイチクレコード「産業戦士の歌」」）

（21）紅野謙介「太平洋戦争前後の時代　――戦中から占領期への連続と非連続」（『コレクション　戦争と文学　別巻〈戦争と文学〉案内』二〇一三・九、集英社。）九二ページ。

※「東京だより」本文の引用は、「復刻版　文学報国」（一九九〇・一二、不二出版）に拠る。